

序

形井秀一

筑波技術大学名誉教授

丁度この原稿を書いている1週間後に、中国の成都で、皮内鍼(円皮鍼)の講義をし、実技を行うことになっていて、社会鍼灸学研究の「序」の原稿を書く傍ら、「日本鍼灸の特徴」の講義と「皮内鍼(円皮鍼)の実演」の準備をしている。

中国の鍼灸と言えば、中国留学をして中国の大学や老師に学んだり、オリエント出版が長く続けている中国鍼灸を学ぶ研修旅行で、直接、高名な中医師から中医鍼灸を学んだり、また、学生時代に中国鍼灸研修旅行を実施している専門学校や大学が少なくないので、東洋医学発祥の地である中国で鍼灸・あん摩(推拿)を学んだ人は少なくない物と思う。しかし、今回はその逆で、日本的に変化・発展した鍼の一方法である皮内鍼(円皮鍼)を中国で講演することになっている。いささか肩に力が入っている気がする。そういえば朝から右の肩関節に痛みを感じて、動かしづらい。

まあそれは、ともかくとして、一昨年(2014年)の9月に上海で開催された中国鍼灸学会でも、やはり「日本鍼灸について」話す機会を頂いたが、中国は日本鍼灸から何かを学ぼうとし始めているのであろうか。その真意は何であらうか。

いやいや、その答えは、まだ、2回の講演のチャンスを与えられただけでは明確ではない。しかし、中国鍼灸界において、新たな動きが出始めていることも事実である。以前にも述べたことがあるが、数年前に中国に行ったときに視察したお灸サロンは、日本のエステサロンのような場所で、北京を中心に40店舗を持つオーナーは、意気軒昂、4000店舗への拡大路線の計画を話してくれた。しかも、施術をしている人は中医師ではなく、エステティシヤンのような存在らしく、新たな資格制度ができたのだろうかという疑問に思ってしまった。

資格はともかくとして、日本の第一次美容鍼灸ブーム(1970年代~80年代頃、エステティックサロンが誕生したが、その時期のことを私はそう呼んでいる。)が中国にも到来していて、経済が高度成長を遂げると生まれてくる健康産業(運動法やサプリメント、なにやら療法、なにやら健康法、なにやら精神療法、などなど)の分野がすでに生まれていて、拡大しようとしている現実に驚かされた。まだ、お灸サロン以外の実態は直接見ていないので、予測の息を出さないが……。そして、そのように生まれてくる健康産業分野は、医療や治療の分野ではなく、飽くまでも健康分野であるので、医療や治療に近い理論や方法や道具を使ったとしても、医療的な方法はもちろん実施しないし、できないであらうが。

ISOやICDで、鍼灸や湯液を医療として国際的に標準化し、社会制度として位置づけようと躍起となっていることと、民間レベルで、健康や生活に関わるものやことを新たに作り産業化しようとする動きとの両面を持つ現代の中国社会の変貌は、(もしかしたら、中国政府の政策方針の変貌は)、社会鍼灸学的にどのように分析し、どのように日本鍼灸と関係づけられるであらうか。社会鍼灸学会会員は、どのような視点で、中国鍼灸の変容を捉えるか、聞いてみたい。それはまさに、日本鍼灸、韓国鍼灸、そして、欧米鍼灸の現在と将来と密接な関係にある話であると考えているからである。